



# 麿作幽霊協会

---

---

tontokaimo39

---

賈作幽靈教会

「君いつ、酷いじゃないか！」

「キヤ、何よ！」

「ああっ！違った！ごめん、人違いだ。」

「驚いたわ！もう！」

「ごめん！間違えたんだ。」

「小突いておいて、ごめんでは済まないわよ、ほら、あそこに喫茶店があるわ、コーヒーぐらいおごりなさいよ！」

「ああ、う、うん……」

「フフ、突然コーヒーをおごりなさいには、貴方も驚いたでしょ、私ね、前にも間違えられて酷い目に合ったことがあるの、それに他人の偽者にされたこともあるし、だから人違いをされると黙ってられないの、どう言うこと、よかったら話して。」

「ああ、道端で知らない女性に声をかけられたのですが、『バックがどうしても開かないの、直していただけない?』と言うことでした、で、チャックの調子を直すと、『ありがとう、コーヒーでもご馳走させて』と言うことになって、」

「あら、私と反対ね。」

「で、喫茶店でしばらく話したのですが、別れ際に『またお会いしたいわ、あ、そうだ、今度の日曜日にN町で教会の落成式があるの、私そこにいるからよろしかったらいらっしやって、私も初めて行くのだけどすぐわかる場所だそう、十時よ』ということだったのです。」

「で、行ったのね?」

「ええ、ところが教会はいくら探しても見つからない、地元の人に尋ねると、『教会の落成式?そんな

話聞いたことも無い』と言うんです、N町と言うのは俺の聞き違いだったかなと思ひ始めた時、一人の男性が『君、このあたりに教会があるはずなんだけど知らないか』と…」

「あら。」

「で、聞いてみると彼も俺と同じことを言われて来てるんですね、それどころか他にももう一人、『くそ！俺たち騙されたんだぜ！』と言うことになって。」

「ふうん、もてない男性が三人そろってのこのこと出かけたわけね、面白い。」

「酷いな、その言い方。」

「あつ、ごめんなさい、面白いと言うのは貴方たちのことでなくて、何のためにそんなことをしたかと言うこと。」

「からかわれたのに決まっていますよ、笑い者にされたんだ！貴女の後ろ姿、その女性にそっくりだったのです、で、思い出すとついムカツとして：」

「そうだったの、でもそれ、からかわれたのじゃ無いと思うわ」

「えっ、どうしてですか？」

「知人で嫌な人ならからかうのも面白いでしょ、でも知らない人をからかって何が面白いのよ、それも三人分のコーヒー代まで使って、貴方たちが出会わなかっただけで、三人より多かったかもわからないし。」

「そう言われるとそうだけど：」

「でその女性、名前を言わなかったの？」

「ああ言いました、前田通子、S女子大だと。」

「ふうん、そう、何のためかしら：」

(S女子大は陽子の入ったところだけど、彼女はもう海外か：そうだ高校の部活の後輩鈴子がいる  
：)

「草野さん？」

「はい、草野です。」

「突然電話してごめん、永井よ」

「はあ？」

「あれ忘れたの？永井夕子。」

「えっ！夕子先輩！」

「久しぶりね、鈴子元気？」

「あっはい、あの先輩、出てらしたのですね！」

「何それ？出てきたって、何だか網走から：それともモグラ？」

「夕子先輩、お隠れになってたんでしよう。」

「お隠れって私生きてるわよもう、鈴子しつかりして、大丈夫？」

「あ、はい」

「ちよつと尋ねたいことがあつて電話したの、鈴子の学校に前田通子って人いる？」

「前田さんですか、います、私と同じ学年だし学部も専攻も同じです。」

「そうよかった、それならよく知ってるわね、その人私に似てる？」

「夕子先輩にですか？似てないと思います、前田さんはおとなしくて静かな人ですが、先輩は活動的であわてんぼうでおっちょこちよい……」

「こら！もう！貴女直子といい勝負……」

「はあ？」

「あつ、こつちのことよ、そうでなくて容姿よ、顔



や姿の方。」

「それはよくわかりませんが、先輩を最後に見たのは先輩達の卒業式の時です、先輩、制服姿だったのですから。」

「そうか、あれからもう五年ね。」

「そうだ先輩、これからお会いできません？陽子先輩のお話もありますし。」

「いいわ賛成！そうか、陽子は鈴子にとって大学の先輩になるわけね。」

「わあ！本当に先輩だ！安心しました。」

「本当について何よ？どうして私はお隠れになってるの？」

「刑事さんが二人も来たのです、それにT大の人たちも、私が先輩と同じ高校の出身だと聞いて来たの

だそうです、先輩がいなくなった『どんなことでもいい、心あたりは無いか』って、みんな同じことを尋ねました。」

（そうかあれね：恭一と原田さん、それに直子たちだ：）

「で先輩、信州の山奥って、どのあたりから出ていらっしやったのですか？」

「また！何よそれ？今度は私熊なの？」

「陽子先輩に、先輩がいなくなったって話したので、陽子先輩は『夕子のことだ、銀行強盗でもやって、信州の山奥にでも隠れたのじゃない、それとも、ガラパゴスへ行ってイグアナと遊んでるのかも』と：」

「フフ、陽子らしい、陽子とは連絡し合ってるの？」

「はい、先日も『夕子が現れたらすぐ教えて、今度

会ったら蹴飛ばしてやるって伝えておいてね、私に無断で隠れたのだから』と言ってました、陽子先輩 外国勤務になったことご存知ですか？」

「知ってるわ、陽子を空港で見送った後よ、少し長くなるけど、私ある人と間違われてね……. . . . . と言うわけ。」

「わあ凄いい、それって映画じゃないですか！」

「昼だろうと夜だろうと一歩外へ出ると、どこから弾が飛んで来るかわからないの……でもボスって面白かったのよ。」

「それ先輩にぴったり！、陽子先輩喜びますよ、何度も私に『夕子まだ現れない？』と聞いて来てましたから。」

「ごめん、陽子や鈴子にも心配かけてたのね、陽子『向こうに着いたら連絡先教えるわ』と言ってたの

「だけど、私がお隠れになってしまったからそのままになってたの、貴女と陽子が親しいことを知ってたから連絡できてたのね：あつ肝心のこと忘れてた、前田通子って人だけど？」

「似てます先輩！でも姿だけですけど、中身は：」

「こら、もうそれはもういいわ、でどんな人？」

「おとなしくていい人なんですけどただ：」

「ただ？」

「二、三年前学校の近くに新しい教会ができたので、彼女そこに入り浸りで：」

「教会ってキリスト教？」

「それが、クリスチャンの人に聞いてみたことがあるのです、すると『よくはわからないけど、あそこは少し変よ、女性は肌を見せてはいけないので夏でも長袖だなんて、外から見るとキリスト教のようだ

けど：』と言うことだったのです。」

「ふうん…」

私は、夕子となじみの喫茶店で待ち合わせた、(茶房・夕子)にしたいところだが、徒歩どうしでの待ち合わせにはどっちからも遠過ぎるのだ。

「ねえ恭一、先週の日曜日N町で何か事件なかった？」

「N町？ああ新聞に出てたじゃないか、殺人だ。」

「えっ殺人…どんな事件？」

「管轄外だから新聞以上のことは知らないな、中年の男性がナイフで刺殺されていたと言うが、ただ新聞に出た段階ではまだ被害者の身元もわからないとのことだった。」

「詳しいこと聞いてみてよ、管轄外でも恭一は本庁

の警部だから聞けるでしょ。」

「だめだ。」

「あら、どうして？」

「また何かに首を突っ込んでるな、事件は殺人だぜ。」

「殺人って今聞いたのよ、わかったわ、私が出遭ったことを話すから、それならいいでしょ。」

止めろと言っても止めないのが夕子だ、仕方なくN署の知り合いを携帯で呼び出した。

「いや、ちよつと気になることがあって・・・そうかすまん、こつちでわかったことがあれば必ず伝える。」

「夕子、事件は解決だな、殺されたのはS女子大の近くにあるS教会にいた山口という男、教会では

雑用をやっていた。」

「ほら教会が出てきたじゃない。」

「うん、教会と言つても新興宗教の類だそうだが、怪しいのはその牧師だが、彼には確実なアリバイがあつた、N署は今困惑している、不審者を目撃した者はいないかと聞き込みをやつたところ、目撃者は続々と現れた、ところがだ、ある者は『背の低い男がうろろうろしていた』と言ひ、ある者は『長身だつた』と言う、『太つた男』と言う者がいるかと思えば『痩せていた』と言う者が現れると言う始末だそうだ。」

「それ、前田通子が派遣した男たちね。」

「そうだ、N署は通子のことを知らない、教えてやろう。」

「待つて、なぜ事件は解決なの？」

「捜査を混乱させるために、嘘を言って男たちをうろうろさせたんだな、犯人は通子、そうでなくても共犯者に間違い無いだろう。」

「被害者が殺された時刻は？」

「発見が遅かったのではつきりしないと言うが、朝の八時から十時の間ぐらいだと言う、午前中には間違い無いそうだ。」

「通子が男たちに指示したのは十時よ、犯行がそれ以前だったら変じゃないの。」

「確実にはわからないと言うのだから、十時以降の可能性もあるぜ。」

「でもやはりおかしいわよ、彼女が犯人、もしくは共犯者だったら、なぜ平気で男たちに自分の名前を教えているの、名前だけでなくS女子大の学生だと言うことまでも、彼女本当にS大にいるのよ。」



「うーん」

「ね、恭一、S教会に行ってみましょ。」

二、三年前に出来たと言うだけに新しく綺麗だが、かなり粗末な建物だ、ドアを開けると、信者らしい数人が横並びの長いすに腰を下ろし、前に立っている牧師らしい男の話を聞いている、これは映画などでよく見るキリスト教会の様子と変わりが無い、夕子と私は最後尾の椅子に腰を下ろした。

「何だ？この臭い。」

「あれよ。」

夕子が小声で答えて指差す、牧師の前の背の高い台の上に置かれている壺のような器から、かすかな煙が昇っている。

「キリスト教、説教の間に香なんて焚くかしら…」

「うん？俺は知らないが：」

「さて、私の話はここまでですが、今日は皆さんに護符をお渡しします、これで神がお守りくださいますでしょう、なおここにある籠にご寄進をお願いします、いくらでも結構です、神のご加護がありますように。」

「夕子、終わったぜ。」

「千円貸して。」

「うん？」

「私も護符を貰ってくるわ。」

「どうするんだ？そんなもの。」

牧師の前に列をつくった信者たちは、護符を受け取って次々と帰って行く。

「キャ！」

最後になった夕子が、牧師に手を伸ばすと同時に足

を滑らせたのだ、牧師が慌てて夕子を支える、横の台がぐらりと揺れ、倒れた器から、中の灰が舞い上がってあたりに飛び散る。

「あつ、ごめんなさい！とんでもないことをしてしまいました。」

私は、夕子のところへ駆け寄った、彼女は慌てたように飛び散った灰をかき集めている。

「いいのですよお嬢さん、過ちはだれにでもありません、ああそこは私たちで片付けますから、この護符を持ってお帰りなさい、神のご加護がありますように。」

私たちは外に出た。

「おい大丈夫か？」

「決まってるでしょ、それより早くビニール袋よ。」

「じゃあお前……」

「フフ、早川さんに頼んでね。」

「あの灰だが、早川が専門家に分析させた、香の一種で別に違法なものではないそうだが、匂いを嗅ぐと何と言うか、気持ちが高ぶり浮き浮きしてくるそうだが、習慣性もなく許されているものだという。」

「そんなものだろうと思ってたの、私たちが勝手に入ってもなんの咎めも無かったでしょ、そこで違法なものを焚くわけが無いわ、でも、信者が浮き浮きしているところで『ご寄進を』というのは、うまいやり方じゃないの。」

「うん、そう言うことか、しかし違法でないのになぜ彼の後を？」

「私たちはあの牧師の後を付けていた。」

「待って、ほら、私が歩いてる。」

「何？うん本当に夕子だ…」

「前田通子ね。」

「なるほどよく似ている、あの後姿は夕子そっくりだ、もし街中で会ったのなら『おい、夕子』と声をかけているぜ。」

「彼女ただ歩いてるのじゃないわ、彼女も牧師の後を付けてる…」

牧師は、人家から少し離れ、放置された工場跡らしい建物の中に入った。

「入ってみましょ。」

正面だけでなく横のドアや窓もみな壊れている、私たちはなんなく忍び込むことができた。

「来たな、ほれこれだ。」

「世話になったな、これを取ってくれ。」

「少ないじゃないか、もう少し何とかしろよ。」

「誰にでもと言うのはヤバイ、金持ちの中年女性だけが狙いだからな、彼女らそのうちいくらでも出すようになる。」

「覚醒剤を神の薬だというのだからな、お前の悪知恵には関心するぜ、ま、今度もそのおかげで楽だった、麻薬班の連中慌てただろうな。」

「ああ、ある女がやってくれたんだ、うまく騙してな。」

「しかし山口のことは大丈夫か？あれで警察はお前に目を付けたんじゃないか？」

「N署は殺しを追っているんだ、覚醒剤には全く気づいてない、それに俺には都合よくアリバイがあったからな、何の心配もない。」

「誰だ！そこにいるのは！」

「おい、逃がすな！」

「お、お前、通子じゃないか！」

「何だ、この女？」

「うちの信者だ：麻薬班の目くらましをやってくれたんだが。」

「牧師様：」

「お前！俺たちの話を聞いたのか！」

「聞きました：教会なんて、神様なんて、みな嘘だったのですね！」

「聞かれたのなら仕方が無い、おい通子、お前も共犯者なんだぜ、警察の張り込みの目をくらすために男たちをうろろさせたんだから。」

「あれは、N町の教会の落成式が寂しい、誰でもいいから人を集めて欲しいと：」

「うまくやってくれたな、通子、知ってしまったんだ、どうだ俺たちと一緒にやらないか、金が儲かる

ぜ。」

「嫌です！汚らわしい！死んでも嫌！」

「おい、その女どうする？」

「嫌と言う以上は……」

「そうか、それならその女は俺にくれ、いま死んでもと言ったな、まあそうなってもらうのも仕方がない、だがその前に……」

「あつ何をするんです！や、止めて！」

男は通子を地面に押し倒し、衣服に手をかけ始めた。

「出るしかないな……」

「そうね……」

「動くな！警察だ！」

「な、何！」

私は拳銃をかまえて男たちの前に飛び出した。

「くそ！」



夕子は通子に駆け寄りとうして足を止めた。

「お前からこそ動くな！この女がどうなってもいいのか！」

男が、通子の首にナイフを当てながら立ち上がったのだ、私は、思わず銃を持つ手に力を入れたが、通子が盾になっている。

「さあどうするお巡りさん！その拳銃をこっちに渡せ！」

夕子がそつと目配せをした、私はその視線の先を目掛けて拳銃を滑らせるようにして投げた。

「ぐわっ！」

銃を拾おうとして腰をかがめた牧師の股間を、夕子が後ろから蹴り上げたのだ、ナイフの男がその方に顔を向けると同時に私は飛び掛った、ナイフをもぎ取りながら顔にパンチを食らわせる、二発目はうま

く顎に当たり、男はしゃがみ込んだ、すぐ手錠を掛け、牧師の方を見ると、彼は俯いたままで呻いている。私は携帯でパトカーを呼び、同時にN署に連絡した。

「男を集めたのは麻薬班への目くらましだった、当日張り込んでいた麻薬班の連中、まんまとやられたと悔しがっている、なにしろいろんな男がうろろするものだから、どの男に目星を付けていいのかわからなかったと言うんだ、しかしそれが幸いした、俺たちは二人を覚醒剤所持の現行犯として逮捕できたわけだからな、現行犯なら言い逃れはできない。」

「あの工場跡にいた男が薬の買い手、牧師は教会にいてアリバイがあったと言うことね、で前田通子

は？」

「彼女は夕子が言った通り、牧師に騙されていたんだ、だから平気で名前を出した、ともかく人を集めろと言われて必死だったそうだが、何と八人も集めている、当日遅れては悪いと思って、九時にN町に行った、ところが牧師から『すぐにS教会に来てくれ』と言う携帯が入り、男たちに悪いと思いつつ仕方なく教会に帰ったということだ。」

「ふうん…」

「しかし夕子、よく牧師に目を付けたな、二人で教会に行ったが、彼に不審なことはなかったのだぜ。」

「ねえ恭一、私に、牧師を見たら飛び掛るなんて趣味があると思う？」

「そんな趣味があったら面白いぜ、ただあれはあの香の灰が目的だろう。」

「あの香が気になったのは事実だけど、あんなものを焚くのだからもしやと思って、それから、ちよつとした鈴子の言葉よ、牧師にしがみつinaながら、あの変な着物の袖をまくったの。」

「うん？」

「腕にはね、ちゃんと痕があつたの、灰はおまけよ。」

（茶房・夕子）は狭いため、内緒の話には向いていない、だが犬上が「本日休業」の札をドアの外に掛けてくれている、中にいるのは犬上の他に私と夕子、それから前田通子、通子は夕子が呼んだのだ。「ねえ、自分によく似てる人がいるって、面白いけど、間違われるのは迷惑なのよね。」

本題をずばりと言うのが夕子の癖なのだが、今日は

どうも違うようだ。

「私は貴女と間違えられた、貴女がN町に行かせた男の一人からよ、私ね、以前にも間違われて酷い目にあつたの、そのため大学の卒業までだめになつたわ、だからまた間違われたときは黙っていられなかつたの。」

「すみません……」

「あら、謝ること無いわ、貴女も私と間違われてるんだから。」

「えっ、何のことでしよう？」

「例の日曜日にね、私は、朝八時過ぎにN町の駅にいたらしいの、『酷いじゃないの、声を掛けたのに夕子ったら無視して』とあの近所からT大に通ってる友人に詰られて……でも私はその頃、布団の中で目覚まし時計と格闘していたの。」

「何のことかわかりません、はっきり言っていただけないでしようか。」

「そうね、じゃあ言うわ、九時にN町に行つてすぐ帰つたはずの貴女が、どうして八時過ぎにN駅にいるの？」

貴女と山口は、八時より前にN町に行った、どっちが誘つたのか知らないわ、どっちがナイフを持っていたのか、何が起こつたのかも知らないわ、ともかく山口の腹にナイフが刺さつた、貴女はそれからN駅からS教会に帰つた。」

「どうして私が山口と？」

「山口は、牧師の覚醒剤をくすねていた、貴女はそれを貰っていた、代わりに山口は、貴女に何かを要求していた、きっと貴女の身体でしようね。」

「…」

「それからね、また二人が似ていることが関係するのだけど、宇野と私が教会に行った時、私を見た牧師は驚いていたわ、きつと貴女に似ていたからよ  
『お前とよく似た女性が来たぞ、中年の男と一緒だった』とでも貴女に話したのじゃない？私のちよつとした行動のことを聞いて、貴女はすぐピンと来た、私と宇野は、『山口のことじゃない、麻薬のことを調べているのだ』と、私と宇野のことを貴女は知っていたのね、鈴子に聞いたのかもわからないしT大の誰かに聞いたのかも、私と宇野が牧師の後を付けた時、貴女も後を付けているように私たちに見せかけた、そしてわざと男たちに発見され、その時の話を私たちに聞かせた、貴女とあの二人の男とは関係ない、ただ騙されていただけだと、私たちに思わせるためでしょう。」

「そんなお話、ただの推測じゃあないですか、証拠も何も無いし。」

「そうね、だから・・・かも、・・・かもと、なったわけ、でも証拠は○ではないのよ。」

「...？」

「それは、夏でも長袖で隠している貴女の腕よ、宇野が警部でも今ここで『腕を見せろ』とは言えないの、でも麻薬班なら、疑惑のある人にはそれが出来るのよ、ほら、交通班は飲酒運転の疑いのある人を強制的に調べることが出来るでしょう、あれと同じね。」

「...」

「私が訴えれば、貴女は調べられるわ、でも訴える気はないの、山口は死ぬし二人の男は捕まった、もう貴女は麻薬を手に入れることはできないわけね、



それを承知しているのは、立ち直ろうとしているのじゃないの？運悪く変なところだったけど、貴女が教会に近づいたのは、崇高な何かを求めたからじゃないの？そんな貴女を訴える気にはならないのよね、何より私とそっくりな貴女なんだから、宇野は警部でお年寄りで少々頭が固いけど、車も少なく見通しもよくて事故など起こりそうに無いところに隠れては、『一旦停止をしなかった』と摘発点数を稼ぐような卑劣な警官じゃないの、きっと私の気持ちをおわかってくれるわ、だから好きなの、犬上さんも同じよ、ここからは貴女自身で考えて、何かを求めて教会を訪れた時の純真な貴女で……」

「通子は自首した、山口に身体を求められたのもその他のことも、ほぼ夕子の推測通りだった、山口

を刺したのは、彼にSの傾向があつて、だんだん激しくなる要求に耐えられなくなつたのだそうだ、彼女立ち直りたいと泣いていたと言う。」

「そう、よかつた、きつと立ち直るわ、恭一それに犬上さん、私の我まま許してくれてありがとう、恭一『すぐ逮捕だ』なんて騒ぐのじゃないかと……」

「お年寄りで少々頭が固いとよく言つてくださいました、感謝感激雨霰だぜ。」

「何それ？古い！」

「ハハハ、お嬢さん、俺はお嬢さんがもつと好きになりました、それに警部さんのパンチとお嬢さんのキックは見事だつたそうですね、俺も見たかつた。」

「あら犬上さん、どこからそんなことを？」

「あれ、お嬢さんが教えてくれたじゃあないですか、お二人の大活躍を。」

「もう、私は、『そつとお蹴りしたの』と言ったはずよ、フフ直子流に。」

「とっさの判断の連携プレーだったのでしょう、そんなことができるお二人はもう一心同体ですね、結婚なんかしなくても。」

「こら犬上、後の方は余計だ。」

「あつ、警部さんはそうでした、でも心配ないですよ、お嬢さんは決して警部さんを離さない、なにしろお嬢さんは警部さんに首つただけで焼餅を焼くほどですから。」

「こら犬上さん、後の方は余計よ！」

おわりに

陽子などと言う名前が出てきて「何だ？」と思われたかも知れませんが、「贗作幽霊社員」にも突然内藤京子などと出てきますが、どっちも以前の作品の人物です、以前のもので読んでいただいていない方、ごめんなさい。

もうこれを最後にしようかなと思っています、P Cの調子が悪く一括アップできなくなってしまうのですが、直ったらまたかも…

ここに登場する人名は全て架空のもので、万一同名の方がいても何ら関係ありません。

## 鷹作幽霊教会

<http://p.booklog.jp/book/82151>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82151>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82151>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ